

は、別れ別れになることになりました。次女と三女は母の実家に、長女の私と四女と長男は両親と共にここに残り、本家の物置小屋を仮の住まいとして、生活再建の第一歩を踏み出したのです。

私は高等科を卒業すると、すぐに大阪の鐘紡に就職しました。ホームシックなどを起こして泣いている暇はありませんでした。一円でも多く家に送金したいと、そればかりを考えて働きました。

家を助けなければならぬという思いでいっぱい、がむしゃらに頑張りました。食べ物も、朝食はお米粒が泳いでいるようなお粥をすすり、昼はトウモロコシの粉で作った黄色いパンをかじり、夕食にはやつとひじき入りご飯を食べました。

弟や妹たちも、中学を出るとそれぞれに働きに出ました。母は、授産所で「機織り」の仕事に精を出していましたし、ときには近所の野良仕事にも雇われていました。

こうして、家族がそれぞれの所で一生懸命に働いたお陰で、本家から土地を分けてもらい、そこ

にささやかながらも私たちの家を建てることになりました。

このときをもって、私たち一家の終戦がやってきましたような思いになりました。

## 北朝鮮からの逃避行

静岡県 勝海 幸男

### 一 生い立ち

私の父は、明治三十（一八九七）年、三島市近郊の大仁町で生まれ、大正五（一九一六）年に北朝鮮羅南第十九師団騎兵第二十七連隊に現役で入営、大正十二年曹長で除隊した。母は、明治三十六年に伊豆長岡町で生まれ、大正十三年、静岡県三島市において土木建築請負業をしていた父と結婚した。ある工事で父は失敗し、羅南の知人で兵隊仲間でもあった、湯山保十郎さんを頼り、昭和五（一九三〇）年春に渡鮮した。当時私は四歳

だったが、父は仕事がなく、騎兵隊の調教士にでもと、お願いしたが、曹長では使いにくいよう一度は断られたが、その後二年という約束で採用になった。湯山さんの家族とは親戚以上の付き合いをさせてもらっていたが、終戦の際には、感興で子供を亡くしたりして、苦労を重ねて引き揚げられた。

父は、調教士の後、昭和八年から茂山で建設請負業を始めた。当時小学二年生の私と小学一年生の弟の二人は、足手まといになるということ伊豆長岡の祖母の家に預けられた。今でも覚えているが、ランドセルが四円。内地の学校に入って吃惊したことは、田舎の学校とはいえ、全校生徒八〇〇人のうち、洋服の生徒が四、五人で、他の生徒は着物姿だった。私は着物と袴が欲しくて、祖母にねだり、緋の着物一揃えを買ってもらった。たしか二円五十銭だったと思う。男の先生は背広姿、女の先生は袴姿で、当時の先生は三十円から四十円の高給取りであった。私たちは、四年生の

終わりまで祖母に育てられた。

北に富士山を眺め、箱根連山に囲まれ、狩野川の清流を見ながら、温泉の湯煙を浴びる自然がいっぱい、のびのびとよく遊んだ。小学校では、祝祭日のときは袴を穿いて登校したが、帰りには紅白の饅頭が渡された。この学校にいたときに、丹那トンネルが開通し、旗行列をした思い出がある。戦後になっての話だが九十五歳で亡くなった祖母が、「あのときが一番楽しかった」と言っていた。

## 二 清津・羅南での生活

昭和十一年の春再び朝鮮に渡り、羅南小学校五年生に転入したが、父親の仕事も順調に進んでいったようだ。

昭和十五年、私が京城（ソウル）の学校にいたときに、「羅南にも護国神社の建設話が持ち上がり、朝鮮総督府に呼ばれて、京城の護国神社の工事の様子を見に来た」とのことで父が訪ねて来たので私が案内し、ついでに総督府の中と、昌慶宮

の秘苑を見学した。その後、父は羅南護国神社の仕事を道庁から請け負うことになり、終戦の日まで続いていた。

昭和十六年三月、京城の通信局学校を卒業し、清津郵便局電信課に勤務したが、西本願寺の裏手の高台にあった電信課の寮から、毎日歩いて坂道を下り通勤した。

清津局は当時ダイヤル電話になっていたが、羅南ではまだ交換手による磁石式電話で、交換手が大勢いた。ある日、友達と二人で中華料理店でフルコースの食事をして十円出したら、おつりはたったの一銭だった。休日には羅南の実家に帰っていたが、バス賃が片道五十銭かかった。

昭和十七年四月、羅南郵便局に転勤になり、自宅から自転車を通ったが二分ほどかかった。羅南郵便局では、日本人が内勤で外勤は朝鮮人だった。電話交換手はほとんど朝鮮人だった。電話課では日本人は六人で、顔と名前は今でもよく覚えている。

人生五十年いや二十五年、私にはそんな時代だ。兵隊にとられれば二十年で終わるかもしれないが、それまではしっかり遊ぼうという意識が、頭の片隅に焼き続けられた。

あるときの夜勤で、交換手に起こされるまで寝ていて、空襲警報の電報を五分ほど遅らせてしまい、憲兵隊に調べられて始末書を取られるという大変なことをしてしまった。

カメラ、空気銃、魚釣、スキー、スケートなどで大いに遊びまくったし、初瀬座の映画も毎週見に行って、悪友に誘われて結構悪いことも平気でやっていた。今思い返しても、よく遊ぶ金があったものだと感心している。浅沼ミノルタのカメラが百二十円、親戚の将校に頼んで借行社で格安に買ってもらった。さくらのブローニフィルム一本八十五銭、フジ八十銭、空気銃が八十五円、自転車が九十円。映画館は五十銭。月給四十八円。家には一銭も入れなかった。

朝帰りしても両親は黙認してくれた。私の家庭

は、子供が多く母は家事で大変だったが、朝鮮人の娘を一人雇って、掃除・洗濯をさせていた。朝食時などは大変だった。私を入れて十人、大きな円テーブルを囲んでの食事は、まるで戦争だった。私などは五杯か六杯お代わりした覚えがある。母はお給仕で食事どころではなかった。

ある日の朝食のとき、いつもの通り娘は同じ食堂の隅で一人食事をしていたが、そこに近所の小母さんが来て、「朝鮮の娘はお勝手に食べなさい。一緒に部屋で食事をすると、とんでもない」と言ったが、これには母も私も吃驚した。母は、「うちの家風ですからこのままで良いのです」と話していたが、私は朝鮮人を差別する小母さんの気持ちに分からなかった。その小母さんの夫は教育者でどこかの校長先生だったが、私はこんな考えで教育をしているのだろうか、奇異に感じた。母はその後何も言わなかったが、これでは反感を持たれるのは当たり前だった。娘はどんな思っていただろう。父は多くの朝鮮人を使っている

が、父の事だから大丈夫だとは思ったが、ちょっと不安を感じた。弟や妹は憤慨して、「人の家に来て何という言い方だ！ あれでも教育者の妻なのか」と言っていたが、特に妹は許せなかったようだ。同じくらいの年齢と同性なので、特に気にかかったようだ。父がいれば、こんなことは起こらなかっただろう。

憲兵には、嫌な思いがある。カメラを持っていただけで尋問され、空気銃を持って遊んでいても文句を言われた。

朝鮮人の電報配達人と付き合い、朝鮮語を教えるもらなかった。発音が難しく、どうしてもうまく発音できず、難しいもんだということを知った。当時は、特殊な職業の人以外は、朝鮮語などを勉強する人はいなかった。

羅南郵便局の電話課長の中西さんと、郵便課の西さんと三人で、朱乙温泉まで行軍をしたことがあったが、何キロメートルあったのか覚えていないが、かなりくたびれた。金田温泉で一杯やり、

帰りは汽車で帰って来た。このころになると地理にも詳しくなっていた。

### 三 内地に帰る

昭和十九年春、不摂生で肺浸潤になり、療養のため一時帰国することとなったが、羅南からの船は航行不能で、汽車で釜山に出て関釜連絡船を利用した。羅南―沼津間片道四十二円だった。

一カ月も療養していると退屈になり、近くの共同温泉浴場に毎日夕方の四時ごろになると入った。当時は混浴で、時々近所の娘さんが入って来たが、気分のいい温泉だった。

肋膜には、「雨蛙を生きたまま飲めば良く効く」とのこと、ある人はそれを信じて実行したという話もある。そろそろ朝鮮が恋しくなったころ、朝鮮に電報を打ちに出掛けて、途中で財布を落としたことに気が付き家に戻ると、祖母が「財布を落としたらもう」と言ってお出してくれたが、近所の娘さんが拾ってくれたそうだ。父の財布を借用していたが、ラッコだかオットセイだかで作った

立派なもので、百五十円ぐらい入っていたが、その話が村中に広がり評判となった。お礼に十円出したら、祖母が「そんなに好きなくてもいい、下駄でも買ってあげればよい」と言ったが、それも一つの思い出である。

いよいよ京城經由で帰鮮することとなり、途中京城で懐かしい本町をぶらぶらと遊んだが、今年から兵役が一年早くなり遊び納めの気持ちもあった。

### 四 軍隊生活に入る

召集令状がきて、昭和十九年十月十日に羅南駅前の広場に集合し、そのままの姿で朝、二一一部隊（師団通信隊）に連行され、営門で父に着替えた荷物を渡す。通信隊だったが、初めは歩兵の基礎訓練。子供のときから兵隊の訓練は野外で見ただけだったので、多少のつらさは覚悟していたが、特に内務班のしごきには参った。でも何とか耐え、無線機の通信訓練ではひと息ついた。同年兵は幹部候補生を除き皆プロだ。モールスには一目も二目

もおかれていた。三号甲無線機の訓練なので移動するのが大変で、本体を背負って山の中を走るのには随分と参った。

昭和十九年十二月末、フィリピン行きの動員令がでた。当時兵隊仲間では、空も海も制圧され半分もフィリピンに上陸できれば上等だ、との話でもちきりだった。同年兵のうち、幹部候補生と入院患者は残り、私もそのうちの一人になった。古兵が「何だ、お前は どうして残ったのか？」と言っていたが、私が衛生兵になると納得した。朝六時の起床ラップで起こされ、一日が始まり消灯ラップで終わる。家にいたときに何となく耳にしていたラップも、兵舎で聞くと何となく気が沈む響きに聞こえてきた。

朝食・昼食の飯盒を持ち、公用腕章をもらい陸軍病院に通う。今ではほとんど忘れてしまったが、看護、衛生、処方箋の書き方など机の上の学習が多かったが、たまには担架を持って野外の行軍もあり、楽しく教育を受けた。各連隊からの選

抜兵と陸軍病院付きの兵隊で、百二十人が教育を受けた。

病院付の兵士の中に羅南の福嶋酒店の息子がいたが、悪友のひとりだった。病院付の衛生兵は内務が厳しく話ができなかった。私たちが昼休みのときなどは、兵舎から大きな声が聞こえていたが、気合いをいれられているようだった。

昭和二十年四月一日付で星が二つになった。師団直属なので命令が早いのではと思っていたが、卒業するまで同年兵は全員一つ星のままだった。変な目で見られ嫉妬されていたかもしれないが、成績が特別良いとか軍功があったわけでもないのに、軍隊とは想像のできない変な組織だが、こっちはお蔭で兵隊暮らしが楽になった。

五月の終わりに今度は満州への動員が下る。内地からの補充部隊も入ってきたが、今度も残留となり、五月の末には第七十六連隊の兵舎に移った。軍医は、内科医のおとなしい人だった。新しく初年兵が入ってきて、医務室の勤務と初年兵の

教育に任じていた。あるとき面会人だと言われて玄関に出て行ったが、姿が見えない。こんなことが三回もあった。学友が訪ねて来たらしいが、私の二つ星を見て慌てて帰ってしまった。軍隊とは、星が一つ違うとこんなことになる社会だった。

演習にもときどき付いて行く。有線小隊は笠置山、天明山から羅赤嶺、朱乙温泉まで広範囲に動いていたが、リールの電話線をガラガラと引きながら木の枝に掛けたり、家の軒に掛けたり配線で大変だったが、無線の小隊は近くは清津、鏡城、朱乙、遠くは、羅津、明川、吉州まで汽車を利用していた。演習で吉州に出掛けたとき、吉州駅前通りの富士屋旅館で、部隊全員がビールや食事をご馳走になり、旧知の西条さんに大変な散財をかけてしまったこともあった。

その夜は、特別許可をもらってひとり旅館に宿泊したが、真夜中に空襲警報のサイレンが鳴り、急いで軍装をして挨拶もせず、方向だけを頼り

に灯り一つない真っ暗な夜道を、やっとの思いで宿舎代わりの製紙会社の寮にたどり着いた。初年兵は無線通信の訓練中で、「ご苦労さまです！」と言ったまま、その横で毛布をかぶって寝てしまった。

初年兵に予防注射をするとき、ある衛生兵はアルコールと間違えてクレゾールの原液で消毒したために、何百人の兵隊の腕が火傷し、この治療には随分と時間と手間がかかった。

ある日、寝台にあぐらをかいて休んでいると、当番兵が慌ただしく私の名を呼んで、「隊長の電報を郵便局で受け付けてくれない。隊長殿が一等兵殿にお願いしろ」と言った。私は吃驚した。電報は二十四時間受け付けているものだと思うが、どういふことが判断がでなかつた。昔の職場だから何とかなるだろうと思って聞いてみると、「私報は受け付けない。官報ならよい」とのことだったので、ちょっと細工をして自分で受け付け発信した。電鍵を叩くのもしばらくぶりだ。懐か

しく一時間以上も手伝いをしてしまった。私服の憲兵が私の方を見て、局員とこそそそ話をしていた。ちょっと不思議に思ったのだろう。

自転車に乗って上官が知っている朝鮮人の漁師のところである独津まで、魚をもらいに行ったこともあった。羅南中学の前を通り、羅北川の右岸を下り水南の手前の峠を越え、下った海岸にあった。この辺は懐かしいところで、交換嬢の実家があったところで、自転車に乗りながら彼女の顔を思い出した。

私の家は陸軍病院の対岸にあり、第七三連隊、第七六連隊も近くで、水筒に酒を入れて運んだり、風呂に入ったり、近所の店で肉饅頭や今川焼などを雑糞に入れて持ち帰り仲間で食べたし、そのほかいろいろと便宜も得ていた。

父に、「お前は兵隊に行っているのか、いつも家にいるなあ。よく分からないが悪いことだけにするなよ！」と常に言われていたものだった。

羅南の出身なのでときどき雑用も受けたが、土

地勘があるので、どこにでも出掛けた。京城の軍司令部にもときどき出張し、書類を箱に入れて下士官と私と二人で、十四年式の拳銃を肩にかけ汽車で往復した。ここも学生時代にはよく遊びに来たところだったので、懐かしさでいっぱいだった。

昭和二十年八月七日、会寧の部隊に通信機（三号甲）を茂山出身の補充兵と二人で運んだが、会寧の航空隊に行くと飛行機が慌ただしく発着していた。さらに第七五連隊に行くと、ここの兵隊が「この裏山にソ連兵が出てくる」と話していた。

その日は、会寧館に無理を言って泊めてもらったが、何か分からないが街の中は夜遅くまで騒然としていた。翌日、会寧駅に来てみると、リュックサックを背負った人々が線路沿いを大勢で歩いている。なぜ汽車に乗らないのか、汽車は空いているのにと不思議に思った。部隊に戻り事務室に報告に行くと、事務室もてんでこ舞いしていた。

昭和二十年八月十三日には、私は陸軍病院の屍

室の前にいた。ソ連機が三機低空で鏡城方面から、清津方面に飛んでいった。清津では黒い煙が点々と昇っていた。病院の帰りに我が家に寄ったところ、家の中は足の踏み場のないくらい散らかっていた。家族は避難したのだろうが、これが私にとってわが家の見納めとなってしまった。

##### 五 吉州を目指し南下

昭和二十年八月十四日正午。部隊も大騒ぎとなり、各々の倉庫は開放されて持ち出し自由となり、私も倉庫に入り物色をしたが、衛生兵には銃がないのでピストルでもと探した。ピストルはあったが弾丸がない。あきらめて医療用の消耗品を持ち出し車に積んだ。

部隊は戦闘部隊ではないので、吉州まで機材の運搬することになり、日本兵は将校一人、下士官二人、私たち衛生兵と初年兵が二十人、朝鮮人兵隊百人が、トラック一両と、馬が引く張る大輪の車十両で、正午に羅南をあとにした。

羅南の町中を見たが、中央公園から羅南橋を

渡って生駒町通りを通ると、ほとんどの商店は戸締まりをしていてガランとしていたが、町中に特別変わったことはなかった。

鏡城駅の手前でソ連機による機銃掃射を受けた。羅南の方向を見ると火薬庫がやられたのか、黒煙がもうもうとあがっていた。朱乙に着き、駅前の薬局に立ち寄るが避難してだれもいない。店の中に無断で入り、包帯やガーゼ、消毒薬、注射液カンフルをダンボール一箱に詰めて無断拝借した。

薬局を出たところで温泉旅館の女性につかまり、「京城まで一緒に連れて行ってください。お願いします！」と頼まれたが、「私は兵隊で、まだ軍務中。とても連れて行くわけにはいかない。駅に列車が止まっているからそれに乗りなさい」と言って断った。喉のところに傷のある二十歳ぐらいの美人だったが、断るのに骨を負った。もうこの時点で終戦になっていたのかもしれないが、私たちにはまだ分らなかった。

会文まで来たが、途中で朝鮮兵が次々と逃亡して人手が足らなくなってきた。小学校の校庭で荷物整理をして、なるべく少なくするため残置する物は焼却をした。その時に、下着から軍服まで全部、新品と取り替えた。慌ててしまったのか、胸のポケットに入れていた財布も一緒に焼却してしまった。このために最後までお金には困ってしまっ

た。羅南からの避難の人たちが団体でいた。その中には知人もいて、食料品（缶詰・固形食品）などを分けたし、負傷者の手当ても行った。

場所は忘れたが、道路の左手に大きな河が流れていた。その右手の民家で休憩したが、一人の軍曹が「この通信機でラジオは聞けないか？」と私に問いかけてきたが、私は「三号甲無線機なら可能ですが、この通信機は二号甲無線機なので使ったことがない」と断った。

部隊は戦闘部隊ではなく、通信隊でもない。では何部隊だ？ 目的地の吉州に到着すれば、当然

師団と通信し命令を受け、その指示に従うのではないのか。放浪部隊がここに存在する。お先真っ暗だった。受信だけならできたが、聞いてみたところでどうするのか。梱包をといて受信の準備をするのには、時間と手間が掛かる。「触らぬ神に祟りなし」でだんまりを決め込んだ。後日談だが、この時点で既に師団は降伏していた。

永安の付近だったか忘れたが、軍曹から「朝鮮人の男が怪我をしている。ちょっと治療してやってくれ」と指示されて衛生カバンを持って行ってみると、右足のくるぶしの上がかなりひどかった。治療して消毒薬とガーゼなどを渡したが、骨には異常がなかった。片言の日本語と片言の朝鮮語で会話をしたが、断片的に分かったことは「満州の竜井から逃げて来た。満州は、満人と朝鮮人とが争いを始め、暴動が起きた。それに巻き込まれて、怪我をしてしまった。何でやられたのか、どうなったのか分からない。これから明川の親戚に避難する」とのことだった。

軍馬八頭に引かれた大砲を有した部隊が、私たちの部隊とあとになり、先になりして南下した。声はかけなかったが、あんな大きな大砲を移動するとは大変だ。敗戦となると始末に困るだろう。健闘を祈るのみだった。

朝鮮人の兵隊が腹痛を起こし落伍したので、上官から介抱するように言われ、隊列を離れてその兵隊の面倒をみたが、ただ痛いだけのようだったので、私が隠し持っていた阿片アピを飲ませた。しばらく休んでいたら良くなったので、二人でいろいろと雑談をしながら歩いた。「私は、朝鮮語が片言しゃべれるので、今までの君たちの隠れ話も聞いていた。終戦のことも、君たちの話で早くから知っていた。兵隊として無理やり召集されてつらいことはよく分かるので、逃亡しても衛生兵の私は黙っていた。日本軍は厳しく逃亡を監視しているが、我慢してくれ。捕らえても手が掛るばかりで何のプラスにもならない。各々考え方が違い個人差があるが、吉州までは我慢してくれるよう皆

に話してくれ、それから、これは私からのお願いだ。反乱行為だけはしてくれないな。どちらにも犠牲と被害が出る。分かってくれるか、食べ物に充分にある」とすると彼は「アラッサムニダ（分かりました）」と笑顔で返事をした。途中で、機銃掃射を受けたが被害はなく、橋が破壊された程度だった。トラックはやられたので残していった。

突然、山の陰からソ連機が現れたが、低空で不意を突かれ、八方に散らばって応戦の構えをした。しかし朝鮮人の兵隊は実弾の装填、鉄砲の撃ち方もよく分からないように、危うく同士討ちになりそうだった。「撃つのは止める！ 止める！」と怒鳴った。それからは夜間行軍になったが、明川辺りで日本軍の飛行機が飛んできて、翼を前後に振りながら、ビラをまいて飛んでいた。ここで初めて戦争に負けたことを公に知った。

八月二十三日早朝、やっと目的地、吉州に到着した。吉州駅も全壊していたし、吉州旅館も爆風に倒壊していた。私たちはその前を通り抜けて、

南大川の手前を左に入った農家を仮の陣地とし、そこに旅装を解き警戒をしながら昼食の準備を始めた。米、小豆、缶詰、砂糖その他食料品だけは豊富に持っていた。炊事場を開放したときに、汗を流して持てるだけ運んだものだ。「汁粉でも作るか」と言って、初年兵に「小豆と砂糖はここにある。鍋は朝鮮の農家にある大きな釜を二つ使え」と指示し、裸になり横になって休んだ。「明日は、二号無線機を設置してラジオでも聞くことにしよう」と考えた。その日は快晴で直射日光の強い、暑い日であった。羅南を出てから雨に降られたことがなかった。そのとき、近くで大きな発砲の音が聞こえた。

警戒に当たっていた兵隊から、「ソ連軍の戦車が、鉄橋を渡ってきて列車に発砲しています」列車は立ち往生してしまい、みんなは上官の指示によって、畑の土手下にばらばらと避難した。

私もびっくりしたが裸のままだったので、慌てて完全軍装をするまでかなりの時間がかかり、逃

げるのは一番あとだった。日が暮れるまで息を殺して隠れていた。荷物は放置したままだったが、朝鮮人兵が適当に処置してくれた。今までの苦勞が水の泡と消えてしまい、残念なことだった。

## 六 八月二十三日からの逃避行

その日、日の暮れるのを待って、吉州の山中に逃げ込んだが、師団主力が恵山鎮にいるとの情報で恵山鎮方向に向かったが、山から下ってきた他の部隊の兵隊に遭い無駄なことを知り、ただ南に南にと向かった。夜は北斗七星を後ろに見て山中を歩き回った。終戦がはつきりしたので、朝鮮人兵士全員は郷里に帰すことになったが、そのうちの三人は命令を聞かずに「日本に連れて行ってくれ」と涙声で訴えていたが、これには上官も困っていた。強く断り家に帰るよう諭し、日本兵だけで逃走を続けた。その後は山に入っては危険を感じ、里に出ても危険を感じ再び山に入るの繰り返しで、彷徨の毎日となった。

城津の町中を歩いた記憶がある。朝鮮の婆さん

が、「オディワツソヨ（どこから来たの）」と聞いたので私が「ナナムエソワツソヨ（羅南から来ました）」というような会話を交わした記憶がある。

そのころは既に食糧はなくなり、食べたり食べなかつたりの毎日で、わずかに持っていた煎り豆を食べながら歩いていた記憶がある。ただ季節がらリンゴなどの果物があちこちに実っていたことは幸せであったが、具体的には何を食べていたか今になると覚えがない。

城津の町中で危険を感じたので、また山の中に逃げ込んだが、いよいよ食べることに欠いてきて、もう何も無い。朝鮮人部落を襲うわけにもいけないので、みんな腹を決めた。所持していた武器を穴を掘って処分した。私は手榴弾を三発持っていたが、みんなに分からないよう深い川の中に放り込んだ。

身軽になって山を下っている途中で、大部隊の朝鮮保安隊に捕まった。長い時間拘束されたまま処分を待っていたが、若い何も経験のないような

小僧に銃剣を突きつけられていたので、危なくないようにがない。やっとな保釈され自由の身となる。

こんな状態が長引けば、みんなは野垂れ死になつてしまふだろう、いっそのこと捕虜になつてもよいと思い、山を下る。何日も苦勞して歩いたのに、平地に出た所は端川の駅前だった。こんなに苦勞して歩いたのに、もう威興の近くまでは来たのではと思っていたが、がっかりしてしまつた。そこではソ連兵が自動小銃を構えて立っていたが、我々の姿を見ても何の反応もない。みんなと相談して、このまま避難民になつてしまおうと、朝鮮人の服に着替えて避難民の群れに紛れ込むことになった。

私は、相談がまとまって「さて服を手に入れるには」と考えたときに、お金のないことに気が付いた。会文で新品の軍服に着替えたときに、古い上衣ごと燃やしてしまったのだ。仕方がなく朝鮮人と物々交換をして、私服を手に入れた。

再び鉄道線路沿いに南へ南へと、ただ歩く。そ

のうちに個人差がでてきて、ばらばらになったり、再び集まってグループを組んだりで、まみちの状態となって南下した。私は「これからは、自分だけが頼りだ。自信をもって頑張って京城までたどり着こう。京城まで行けば朝鮮人の知人もいるはずだから」と自分に言い聞かせた。ポケットを探ると、金目のものは何一つないが、軍隊手帳が出てきた。ちょっと開いて見たが、これを持っていると危険かなと思って、途中の谷底に投げ捨ててしまった。

こちらから何も言わないのにオモニが食べ物を買ってくれた。こんなことが何回もあり、随分と助かった。私が乞食以下の姿だったのか、またはかわいそうにと思ったのか、それともまた避難民と思って助けてくれたのか、いずれにせよ「カムサハムニダ（感謝）」したものであった。その反面、ソ連兵の横暴には許せないものがあった。線路沿いに歩いているとジープで乗りつけ、避難民を並ばせて自動小銃を発射しながら脅迫して、金や時

計など金目の物を奪って行った。

ある田舎町を歩いているとき、オモニに呼び止められて、大豆の煎ったものを袋にいっぱい入れて差し出された。「コマプスムニダ（ありがとう）」と言って私はおし頂いたが、さらに「ちょっと待って。これも持って行きなさい。水などを飲んでお腹が痛くなったときに、これを飲みなさい」と言って紙袋に入ったものを差し出された。よく見ると阿片が入っていた。北朝鮮は阿片の集散地なので、薬として持たせてくれたのだった。感謝するほかなかった。

新北青町まで来て駅で寝た。コンクリートの土間なので、いくら九月の初めとはいえ北朝鮮の夜は急激に冷えてくる。建物の中なので、風がこないだけでもいいと思いい横になって休んだ。腹が本当に空いてしまうと、空腹を感じなくなることを初めて体験しながら一夜を過ごした。

翌日また歩き出したが、両膝が痛くて普通のとおりに歩くことが困難になってきた。何回となく、

途中の小川の水で冷やしては、騙し騙し歩いてきたが、この冷やしたのが悪かったのか、どこか覚えてはいないが、かなり長い鉄道のトンネルをくぐり抜けた所で、線路際にうずくまってしまった。現地の人たちが来て、「どうしたのですか」と声をかけられたので、「両膝が痛くて歩けない、助けてください」と嘆願したら、その人は線路際に立ち並んでいる集落の中の一軒に連れて行ってくれた。私はここで助けていただいた。二日ばかりその家で世話になり、食事も食べさせてもらい元気をとり戻した。夏の掛け布団一枚を頂き、それを紐で十字に縛り肩に担ぎ、再び南へ向かって歩き出した。その人は、付近にあった学校の先生のような感じを受けたが、心から感謝をした。この夏掛け布団のお蔭で、それからの避難の旅が随分と助かった。

興南の近くまで来て、また保安隊に捕まり、避難民は一カ所に集められた。何百人という避難民が集まっていた。保安隊の指示で「今から咸興ま

で歩く」ということで、何百人という避難民が歩かされた。ひと晩中歩き、朝方やっと咸興陸軍病院を右手に見る、ある小さなお寺に着いた。ここが、私たち何百人という避難民の仮の宿となった。やっと気持ちも落ち着き周りを見ると、何と皆の汚れた姿が目に入った。私もそうだが、黒い顔、汚れた衣服、真っ黒な鍋釜、腰には空き缶をぶら下げた姿。見ているだけでもつらいことだった。羅南の部隊で一緒だった同僚兵の顔も五人ほど見えた。他の兵隊はと聞いたが、分からないという返事だけが返ってきた。

#### 七 咸興で父親に拾われる

そのころになると今日が何日だか分からなくなっていた。あとで考えるに、多分九月の中旬ではなかったかと思う。

ある日、何となしに町に出てふらつきながら武徳殿の前まで来た。避難民が大勢集まっていた。そのときに、羅南の私の家の裏に住んでいた中川の奥さんに、それこそばったりと出会った。お互

いにびっくりしたが、中川さんが「お父さんが裏の会議室で打合せをしていますよ！」と言われたので、急いで裏に回り会議室をのぞいて見た。父がいるではないか。打合せ中だったのでしばらくそこで待っていた。そのうち打合せが終わって父が出てきた。お互いに声も出なかった。そのまま父と避難先の小学校に行った。家族は全員元気でそろっていた。父はみんなを前にして、「幽霊を拾ってきた。私の長男です、よろしくお願いします」と紹介した。確かに手足のある幽霊だった。運がまだ付きまっていたのか、「助かった。ここからは親父に付いて行けばいい」と思うと、心も体もなにかしらのびのびとした。

父の話では、「八月の十三日に、道庁から護国神社の工事代金として八万円の小切手を受け取ったので、すぐに現金にするため銀行に行ったが、そのときは既に銀行は閉まっていたためだった。換金できるところを探しに吉州で降りたり、さらには平壤（ピョンヤン）の近くまで行ったが駄

目で、その挙句の果てに咸興まで来て、そこに留まってしまった」とのことだった。

人間らしくなり食事もタバコも頂いたが、周りをよく見るとみんなは心身ともに疲れていて、ごろごろと横になっていた。しばらくはここでの避難生活となったが、夜になると毎晩、ロスケが襲ってきて、その無謀な行為には憤りを感じたものだった。

九月の終わりころに、京城まで汽車が出るというところで、咸興駅前に集合した。かなり待たされたが、何とか乗ることができた。無蓋車だったが、それでも日本に帰ることができれば上等だと思った。鉄原までは順調だったが、そこで止められた。ソ連軍との間で二・三日やりとりがあったが、管轄違いなのか命令系統がうまく通じていないのか、どちらか分からないが、結局のところ再び咸興駅まで帰されることとなった。私たちは、途中の元山で下車することができた。それは、元山に親戚とか知人のある人で、駅まで迎えに来れ

る人があれば、下車の許可が降りたからだったが、それは西条さんの冒険と機知のおかげであった。

#### 八 元山での悲しい越冬

元山市では、市内泉町にあるお寺の向かい側の葬儀屋の二階に避難した。ある日の夜のこと、そこで保安隊の臨検を受けたが、階下に住んでいた若い男の四人グループのうち三人が捕まった。助かった一人は幸いに浴場に行っていたので、三人が捕まったことを聞き、慌ててどこかに逃げ出した。四人は関東軍の兵隊のようだった。保安隊の臨検は、その後何回となくあった。向かいのお寺では、避難民の人たちでいっぱいであったが、みんなは一様に顔は煤け、ぼろぼろの衣服で、庭に竈かまどを作り炊事をしていた。死人も多く出ていて、遺体は薦こもで包み大八車で運搬していたが、それはそれは悲惨極まりないものだった。

その後避難民の一部は、安辺の海軍工廠跡に移されたが、我が家族も全員一緒に移った。二百人

ぐらいの集団生活となったが、食べるためにみんなはそれぞれの仕事を探して頑張っていた。私も、朝鮮人の農家に稲刈りの雑用に出掛けて、一日五合の米をもらっていた。毎日出掛けて米をもらい、主食の足しにした。

父が、嫌疑をかけられて、保安隊に拉致されたことがあった。寒くなってきたので、弟がオーバーを持って出掛けた。そのオーバーのポケットから朱乙木材店の領収書が出てきたので、それが証拠となり、しばらくして父は釈放された。同じ日に何人かの日本人が帰って来なかった。特に、警察官、憲兵隊員出身者には恨みを持っていたようだった。朝鮮人が五、六人のグループをつくって、国債その他の債権を日本人から安く買い漁っていたようだ。

そのうちに、それまでいた葬儀屋の二階から、同じ泉町の小山にある「忠魂碑」の下の一軒家に移ったが、これは元山市の日本人会の人たちのお陰によるものであった。だが、生きていくために

は相変わらず父、母、兄、弟はそれぞれ働いていたが、小さい子は食べ物がなく、かわいそうだった。粗末な食事に我慢してもらおうしかなかった。

父は会の役員とかで世話会に出入りしていた。

私は、日本軍からの戦利品をソ連本国に移送するための運搬作業で毎日港に行き、戦利品を船に積み込む仕事をした。この寒さ厳しいときに夜間作業が多く、腹に力のない体では寒さが身にしみていた。家族も全員それぞれ働いていた。長女の恵美子は元山の割烹『五月』に住み込みで働いてし、小学五年生だった次女の万恵は、同じく『五月』に住み込みの子守となっていた。さらに三女の久恵は元山の北、高原の朝鮮人の家に住み込み、四歳ぐらいの子の面倒を見ていた。三男の鋭朗は、敗戦時清津師範の二年生だったが、『五月』の親戚の蒲鉾屋の店先でスケソウダラを売っていたが、彼は避難民の人には、サービスしたと言っていた。それ以外に、家には幼い子が三人もいた。

元山の町では、寒さと飢えで病人が多く出て、多数の避難民が死亡した。特に抵抗力のない老人子供の死亡が多かった。ここで、父も発疹チフスに感染してこの世を去った。強心剤の注射してもらったが、効き目がなく駄目だった。頑健な父であつたが無念だった。世話になつていた西条さんも、時を同じくあの世に旅立った。知人の松井さんに「このままで日本に帰ったら後悔するから、遺骨にしなさい。私が葬儀屋に頼んで責任を持ってお骨にするから」と言われ、何とかお金を工面して、昭和二十一年二月五日早朝、遺体を大八車に乗せ、私がひとり後押しをして、粉雪の舞う寒い中、狭い砂利の山道をコトコトと音を立てながら、山の奥の火葬場に向かった。骨を拾うときには、声も無く涙も出なかったが、帰りにはひとりで遺骨を抱いて砂利の山道を歩いていると急に涙が出て止まらず、わけもなく大声を発しながら家に向かった。父を失った気持ちとはこんなものか、と考えると精気もしぼんでしまった。

私もその後発疹チフスに冒され、毎日高熱にうなされ足腰は立たず、頭髮は真つ赤になってしまった。その時に、母親に買ってもらった夏みかんの美味しかったことは、今でも忘れることができない。

## 九 元山から脱出し日本へ

元山の在住者や各地から集まってきた避難民も脱出し始め、日本人も少なくなつて寂しくなつてきた。流言も飛び、身の危険も何となく感じるようになった。特に若い男は、ウラジオストックに連れて行かれるという話が誠しやかに流れていたが、何が本当なのか皆目分らない中、我が家族の中でも脱出の相談が始まつた。高原に住み込んでいた妹も帰つて来た。この妹は、住み込み先の家族に好かれて、「家族として大事に育て面倒も見ますから、ぜひおいて行つてください」と言われていたが、これには母も困惑した。この朝鮮人家族には、大変に助けてもらい感謝をしていたのだが、妹の「私を置いて行かないで」という一言

で決心がつき、丁寧にお断わり申し上げた。今考えてみると、ぞつとして鳥肌が立つようだ。一緒に帰つて来て本当に、本当によかつたと思う。

世話会から汽車の切符を手に入れたが、私は山越えを決めた。若い男は汽車では危険だとのことで、避難民の友達からも誘いがあつたので、私は一足先に三人の友人と出発した。家族は、あとから汽車で安辺から出発する予定で準備をする。

これから若い男四人の逃避行が始まる。今では名前もろ覚えとなつたが、大分県出身の大野君、陸軍の下士官だった新潟県出身の柴田君、そして朝鮮語が非常に堪能な日鉄関係の萩原君という人だつた。

元山陸軍病院から西の山に入り、ソ連兵を警戒しつつ山の峰を歩く。山から山への獣道ばかりで、いくらもはかどらない。やがて凄い山岳の壁にぶつかる。やつとのことでこの山岳を越える一面の雪の積もつた別世界となり、歩行が一層困難となつた。朝鮮人の部落に入り、農民に道順な

どを聞く。萩原君の朝鮮語で大いに助かった。しかし途中で会った自称保安隊員には酷い目に遭い、強打、強盗、嫌がらせをされ、かなり血が頭にのぼってきた。私たちのあとからこの道を避難するであろう人たちのことを考えると、何も手荒い抵抗はできなかった。途中では避難行動中のかりの人々に会った。

世話になった部落によっては、主食がまちまちで、馬鈴薯<sup>ポテト</sup>、粟、トウモロコシ・大豆など距離間がそんなにならないのに、主食がこんなに違うものかと驚いたくらいだった。朝鮮では、お客さんには真鍮の食器で山盛りにした食事を出し、お客はそれを残しても失礼にならないという風習があつて、残りの物はあとで家族で食することだった。

場所は忘れてしまったが保安隊員に捕まり、その本部に連行された。かなり厳しく取り調べを受けて、その挙げ句に、「お願いがある。日本人の婆さんと、娘が歩けなくて、保護している。何と

か連れて行ってくれないか」と言われて、その人に会ってみて驚いた。吉州の富士屋旅館の婆さんと娘さんではないか。婆さんは全く歩けない。なぜこんな険しい山道を選んだのかと、そのときは不思議に思っていた。四人で交代に婆さんを背負って歩いた。四日間ぐらい山道を歩いたが、四人ともとうとう音をあげてしまった。私たちはいろいろ相談した結果、娘さんだけでも助けようということになり、その旨を婆さんに話した。かなりきつい言葉も出したが、どうしても分かってもらえなかった。娘さんの気持ちも聞いたが、受け付けてくれなかった。時間を掛けて説得に当たったが駄目だった。

農家の人に大野君がお金を渡し、これからのことをよく頼んでその場を立ち去ったが、この出来事は私たちの間ではそれから禁句となった。

私は、この富士屋の家族には父を通じて面識があり、特に心が痛んだ。無理にでも引張って連れて来た方が良かったのか、それとも置いてきた

ことがお互いに幸せなことであったか、今でも分らない。中国の残留孤児のテレビを見ると、当時を思い出し目頭があつくなる。

多分臨津江と思われる大きな河を何回となく渡って、やっと三十八度線らしき河にぶつかった。霧が深くてよく見えず、仲間のうちの二人ははぐれてしまったのか、なかなか来ない。流れも早く深さも分からない。向こう岸も見えない。私はしり込みをしたが、二人で肩を抱き合い、浮き上がりながら何とか渡る事ができた。これを見ていた対岸の朝鮮人が吃驚していた。知らなかったが三十八度線はもう過ぎていたのだった。はぐれた二人は橋を渡って来たと話していた。考えてみれば、随分無茶をやったものだった。その後、米軍に収容され体中を消毒されて、紋山から汽車に乗り京城に着いた。本町（忠武路）のお寺に一泊し、竜山から一路無蓋車に乗って釜山に到着。船で博多に上陸して真新しい軍服を支給され、現金で二百円をいただいた。ここまで生死を共にし

た三人ともそれぞれの駅で別れて、私も沼津駅に降り立った。

降りた途端に吃驚したが、駅もバラック建て、町中は何もなく、遙か彼方に千本松原が眺められ、さらにその向こうには海が見えていた。伊豆長岡町の叔父さんの家に取りあえず逗留して、農業の手伝いをしていた。里芋の収穫のときには、親芋を畑の隅に集めておいた。都会から食糧を求めに来たのか、声をかけてきて「その里芋を売って下さい」と頼まれたので、叔父が「この芋は親芋ですから、美味しくありません。良かったら全部差し上げます」と言ったら、喜んで全部をリュックサックに入れて帰って行ったこともあった。日本は本当に大変な食糧難の時代だと思っ

た。少し遅れて家族も無事に引き揚げてきたが、家族は元山から出発するときのそのままの姿だった。博多からこの惨めな姿で旅を続けてきたかと思うと、感激よりも悲しくなり、涙が先になっ

た。家族は汽車で鉄原に着き、鉄原から歩いて湊川を越え京城に出た。船の中に伝染病が発生し、しばらく船中に留め置かれたとのことだった。

平成十（一九九八）年十月五日、その母も亡くなった。くしくも祖母と同じ九十五歳。私はそんなに生きることができらるだろうか？

## 十 戦後の生活

引き揚げてから、私は叔父の農業を手伝っていたが、ほかに仕事がなく困っていた。建設省の狩野川放水路工事が始まり、建設省沼津工事事務所に採用された。それからは転勤に転勤を重ねて、最後の職場として静岡工事事務所の勤務となって沼津に戻り、昭和五十八年五月に定年退職した。定年後の第二の人生として、沼津の中部建設協会に再就職したが、そこも平成五年五月に退職した。

定年になり、韓国には何回となく旅行した。京城では昔の学校を訪ねたが、そのままの姿で残っていたし、本町（忠武路）三越デパート、朝鮮銀

行、明治町（明洞）映画館などの建物も残っていて、懐かしさでいっぱいだった。ボート遊びをした漢江も、遊覧船で上下して遊んだ。南山にあった朝鮮神宮の階段を見たが、神宮の跡はもう何もなかった。

現在、年金生活で細々と暮らしていて、毎日が日曜日の状態である。引揚げ後は、日本中が食べること困窮した時代だったし、私たち家族もご多分にもれず貧乏のどん底にいたが、赤貧にめげずに踏んばった。兄弟は全員孫のいる年齢になったが、お蔭様でみんな元気で頑張っている。

戦前、戦後、避難行を通じて北朝鮮の人々には親切にしてもらい、助けてもらい深く感謝しているが、一方、嫌な思いも去らないままにいる。元山で、父と西条さんを失ったのは、返す返すも無念残念なことで、その思いは胸の中からいつでも去らないだろう。

平成七年五月二十一日、伊豆大仁町の長谷山蔵春院で、父と西条さんの五十回忌を子供と孫全員

でとり行った。併せて、清津、羅南その他北朝鮮の地で無念の死を遂げられました方々の冥福をも、心からお祈り申し上げた。昭和二十年八月十三日、北朝鮮の羅南から避難民として九カ月の避難行の末、着のみ着のまま日本に帰り着いたのが、二十一年五月の終わり。その母も九十五歳の天寿を全うした。

私は父母のお墓を鄭重に護っていきます。

## あかい夕日

大分県 波多野 保子

### 一 両親の出会い

父は、埼玉県の農家の次男として、明治二十七年（一八九四）年一月に出生、母は、京城（ソウル）で雑貨商を営む家の、次女として明治三十八年十月に出生した。

血気盛んな青年だった父は左翼思想にかぶれて

いて、口うるさい田舎では住みづらく、次男という身軽さもあって日本を脱出した。アジア各地を点々と放浪し青春を謳歌していたが、台湾でマリアにかかり止むなく一時帰国したものの、回復後はすぐに京城へと居を移し、いろいろな仕事を経験していたらしいが、やがて新聞記者となり、水を得た魚のように各地を走りまわっていた。

そんな折、京城で弁護士をしていた母方の叔父の紹介で母と結婚することになった。

何ひとつとして不自由なく育てられた母は、貧乏には程遠い生活をしていて、茶道、華道、行儀作法、それに当時としては珍しいテニスなどをするハイカラさんだったようだ。金もなく、ただひたすら自分の道を歩き続けていた父に、何故について行ったのかは不可解である。愚痴も言わずにひたすら父に寄りそい、この地に骨を埋めると決意した父母の生活は、雨の中、長男を背中におんぶしての新聞配達でスタートしたが、それからは新聞販売店、書店、スポーツ用品店などだんだん